

植物短歌辞典

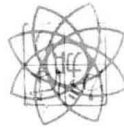
針ヶ谷鐘吉 編

東京 加島書店 発行

編者紹介

明治三十九年東京に生まれた。
東京帝国大学農学部林学科卒業。
東京農業大学造園科講師を経て、
現在早稲田大学理工学部建築科
講師。

著書に、庭園模記（昭和十三年西ヶ原刊行会）と西洋造園史（昭和三十一年彰国社）とがある。



植物短歌辞典

定価 五〇〇円

昭和三十五年二月十五日 印刷
昭和三十五年二月二十日 発行

編者 針ヶ谷 鐘吉

発行者 東京都豊島区椎名町七の三八五五
加島 喜代志

印刷所 東京都板橋区栄町二三
新興印刷製本株式会社

東京都豊島区椎名町七の三八五五番地

発行所 加島書店

電話・落合(951)五六一六番
振替・東京九五七八〇番

序

本書は万葉の古歌から、現代短歌に至る数々の歌の中から、植物を詠んだ歌を選び出し、これらを植物によつて分類し、簡単な解説をつけながら五十音順に配列したものである。

先ず本書の編集を思い立つに至つた動機について述べよう。編者は元來造園を専門とする者で、植物学者でもなければ歌人でもない。造園では御承知のように、植物を主要な材料として用いるため、植物に親しむ機会に恵まれている点で植物学者に似ているかも知れない。しかし造園家は植物学者のように、植物を机上で虫眼鏡を手にしつつ観察することをせず、生々とした自然の俣の植物の姿を眺めようとする点で、その觀賞態度は歌人や俳人の境地に近いものがあるであろう。編者はかねがねこうした理由から、植物学者の手に成る植物図鑑に飽き足らず、個々の植物の生態的美觀を印象づける何かいい方法はないものかと考えていた。たまたま彼の歳時記に列挙された植物句がそれぞれの植物の持つニュアンスやムードをよく表わしていることにヒントを得て、植物短歌を蒐集することによつてこの目的が或る程度達せられるのではなからうかと考えた。

こうした期待のもとに、近代歌人の歌集の中から、植物を詠んだ植物歌を手当り次第に拾蒐してゆ

くうち、何時の間にやらかなりの量になり、一応「近代植物歌集」といつたものが出来上つた。これらを植物別に整理してゆくと、大体編者の期待通り、さながら「絵の無い植物図鑑」の観を呈するものとなり、植物の背景と相俟つて図鑑では見られぬ季節や気象の変化による植物生態を如実に表わす結果となつた。而も歌は俳句と異つて植物を客観的に描写しているので、編者の要求を一層満足させるものとなつた。この俣でも編者の目的は達せられるのであるが、先輩知己の勸奨で、植物歌の拾蒐の手を更に万葉に迄延ばした。しかし、古歌では、近代歌のように植物そのものを詠んだ純粹の植物歌に乏しく、編者の目的に添わねものが多いので万葉植物を除いては少数のものとどめた。解説はなくとも歌だけでも植物の特徴を示すに充分だと思ふが、日常目に触れ難い植物もあることゆゑ、簡単な解説をつけ、これに更に挿絵を入れて説明の補いとした。挿絵は今では少々手に入り難い江戸時代の本草学者の筆に成る植物図を借用した。それは単に編者の好古癖だけではない。これらの図が現代の植物学者の描いた図と比較し、決して見劣りするものでなく、その生態描写に至つては遥かに優つているものさえあると思つたからである。かくて、本書は一見図鑑風の体裁をととのえて来たが、出版社の都合で図は極く一部の植物にとどめたので、結局書名は辞典というところに落ついた。しかし辞典とはいへ、例歌に主力が注がれているのであるから、やはりこれを植物歌集といつた方が當つているかも知れない。

本書の編集には数年の日子を要したのであるが、もとよりこれで完全とは言い難い。なお入れるべくして見落した植物短歌も数多いことと思われる。読者諸賢の御教示を得られれば誠に有難い次第である。

前記のような目的で編集された本書が、世の多くの植物愛好家や短歌・俳句に親しむ人達のためによなき伴侶ともなれば幸いである。終りにのぞみ、本書刊行の幹旋に一方ならず御尽力下された農業大学講師近藤竜雄氏と短歌の蒐集に幾多の便宜を与えられた中島彦治郎・山本喜策両氏の御厚意を心から忝なく思うものである。なお、本書の出版を快よく承諾された加島書店主並びに編集の労務に当られた渡辺忠雄氏に対しても限りない謝辞を惜しまぬものである。

昭和卅五年一月

編 者 識

凡 例

凡

一、万葉より現代に至る歌の中から植物を詠んだものを採集した。

一、選歌は主として著名歌人の作品から採取したが、それらの中に例歌のない植物にあつては、無名歌人の作品からも採取した。

一、近代歌はできる限り、諸家の単行本の歌集から採集するよう努めたが、歌集が手に入らなかつたため、「岩波文庫本」「現代短歌全集」(改造社版)「現代短歌大系」(河出書房版)「現代日本文学全集」(筑摩書房版)等から拾集したものもある。

一、明治以前の古歌は歴代歌集を渉獵する暇がなかつたので、左の諸書に載つたのを転載した。

『国文学に現はれた植物考』 松山 亮藏著 明治四十四年刊

『万葉植物新考』 松田 修著 昭和 九 年刊

『万葉古今動植正名』 山本 章夫著 大正十五年刊

『花と芸術』 金井 紫雲著 昭和 四 年刊

『樹木と芸術』 同 著 昭和 五 年刊

『草と芸術』

同 著 昭和 六 年刊

『蔬果と芸術』

同 著 昭和 八 年刊

一、選歌の基準は植物の生態美を現わした歌を採ることに主眼を置いた。したがって植物を詠み込んでいても、人事が主で、植物が従になつている場合はなるべく除くことにした。尤も一種一首の場合には例外である。

一、生態美には関係ないが、植物にちなみのある枕詞と物名歌も採り上げた。

一、一首の中に二種以上の植物が詠み込んであるときは、それらの植物の中で焦点を置いていると思われる植物の項目に収めた。

一、著名な連作歌は一首も省くことなく掲げた。

一、歌の排列は古歌を先にし近代歌を後にした。

一、同一植物の歌の排列の順序は、大体その植物の四季に於ける変化に応じて並べた。

一、同一植物の歌にあつて更に「芽」「葉」「花」「実」等々の歌に分けられるものはこれを分け、

その最初の歌の上にゴシック書体の字を以てこれを明示した。

一、この場合二字になるものは最初の一字を以て略号とした。

凡

例

例 若_二若葉 二_二二葉 青_二青葉 黄_二黄葉 紅_二紅葉 枯_二枯葉 落_二落葉 木_二木立

一、植物名は五十音順に排列した。

一、和名の植物は平仮名、洋名のものは片仮名を以て区別した。

一、出典の明かなものは歌の下に括弧内に歌集名を掲げた。

一、解説は凡て新仮名遣、歌は旧仮名遣によつた。

一、植物の解説は主として左の諸書を参考にした。

『日本植物図鑑』

牧野富太郎著

昭和二十七年刊

『花木園芸』

宮沢 文吾著

昭和十五年刊

『広辞苑』

新村 出編

昭和三十年刊

『作歌辞典』

窪田 空穂
尾山篤二郎 共編

昭和十一年刊

一、挿絵に用いた文献は次の三種である。

『草木図説』(全廿卷)

飯沼 慾齋著

安政三年刊

『花彙』(全八卷)

小野 蘭山著

明和二年刊

『秘伝花鏡』(全六卷)

葎 園 著

安永二年刊

一、巻末の「植物短歌用語小解」は例歌を解釈するに便宜のために集めたもので、植物短歌用語の他に造園、園芸、林学、植物の諸学上の用語をかなり加えてある。

あ

あゝ(あゝ) 藍 *Polygonum tinctorium Lour.*

たで科の一年生草本。秋、花梗を出し、紅色の小花を穂状につける。葉茎から染料をとる。

はりまなるしかまの里にほす藍のいつか思ひの色に出づべき(現存六帖)

かりをけるつかねの藍のそこあればあくまでそめん色ぞしらるる(夫木集)

うき人をなどあながちにいひそめてあゝよりもこき色に出らん(新撰六帖)

衣笠内大臣

藤原 知家

藤原 光俊



あ い

(草木図説所載)

あおい(あゝ) 葵

あおいには「ふたばあおい」「ふゆあおい」「たちあおい」がある。

ふたばあおい 二葉葵・双葉葵 (*Asarum caulescens Maxim.*) うまのすずくさ科の多年生草本。地下茎から短い地上茎を出し、二枚の心臓形の葉をつける。早春

紅紫色鐘状の花をつける。古来賀茂神社の祭事に用いた。別名、かもあおい(加茂葵)、かざしぐさ、日蔭草、

二葉草、両葉草。

ふゆあおい 冬葵 (*Malva verticillata L.*)

あおい科の多年生草本。茎は高さ約一メートル。全株に毛がある。葉は円形で浅く五七裂、春から秋にかけて淡紅色の五弁花を開く。葉は食用。種子は利尿薬とする。別名、あおい。

たちあおい 立葵 (*Althaea rosea Cav.*)

あおい科の越年生草本。小アジア原産。高さ約二メートル、葉は心臓形で縁は五七に浅裂、葉面に皺がある。春夏の頃、各葉腋に紅、白、紫などの美花を開く。觀賞用。別名、はなあおい。つゆあおい、蜀葵。一般にこの立葵をあおいと呼んでいる。

万葉集にあおいを詠んだ次の歌が一首ある。

梨棗^{さく}黍^きに粟^{あは}嗣^つぎ延^はふ田^く葛^すの後も逢はむと葵^{あひ}花^は咲く

(卷一六)

この葵について古来、(一)ふゆあおい説、(二)かもあおい説、(三)たちあおい説の三説があるが、一般に(一)が妥当と信じられている。

ちばやふる神の卯月になりにつけりいざうちむれて葵
翳さむ (古今六帖) 説人不知

宿毎にかさすみあれの葵草神のしるしやときはなる
らん (現存六帖) 前太政大臣

白き指に紅のにじみてなまめけるにほやかさもて咲
く葵かな (銀) 木下 利玄

足たゆく床几にをれば水茶屋の葵の花に日照雨かゝ
るも (紅玉) 同

蚕をかへる家内^{やうち}をぐらし前庭^{まへにわ}に薄紅葵^{うすべに}こども匂ひ
(同) 同

雲通り磯の日くもれり渚^{さし}近き墓^{かぶ}地ににははし紅葵の
花 (同) 同

しづかなる一むらだちの葵さき入りこし園は飴色の
土 (歩道) 佐藤佐太郎

夏ながら庭なかにして咲き散りしのちいさきよく葵
枯れたり (冬びより) 谷 鼎

蜀葵^{あふひ}の実茎にしみに乾枯らびてこころをとむる秋
となりたり (忍冬) 小田 観螢

あおき^(あを) 青木 *Aucuba japonica Thunb.*

みずぎ科の常緑灌木。山野に自生する。雌雄異株。幹が青いのでこの名がある。葉は長楕円形で先端尖り、縁に鋸歯があり光沢がある。春に細かい暗紫色の花を開き冬に美しい紅い実を結ぶ。それでこの木を桃葉珊瑚とも書く。古くから庭木として愛好され、日蔭を好むので下木に最適。種類は多く、葉の幅の広い「やまばあおき」、「斑入あおき」、「細葉あおき」、葉が円い「だるまあおき」、実の白い「しろみあおき」などがある。

葉 青木葉の若葉のいろのつやゝかに朝日すがしく雨ふりそゞぐ (天之真禪) 香取 秀真

ひえふと今日は雨降り青木の葉なめらにぬれて今日
は雨ふり (紅玉) 木下 利玄

青木に犬の尿^{はら}のしたたれり美しきかなや小さき青木
に (雲母集) 北原 白秋

雪ののち清くあらはるるもろもろに青木の葉あり道
のかたはら (歩道) 佐藤佐太郎

実 青木の実毎年落ちて生ひけらしこゝの谿間の多くの
青木 (紅玉) 木下 利玄

青木の実赤くなりたり冬さりてかわききりたる山の
斜面に（紅玉） 木下 利玄

見馴れたる庭の桃葉珊瑚の赤き実をいたくうつくし
むこの朝戸出に（伏流） 谷 鼎

くれなゐの青木葉の実は淡雪のふりにふれどもあざ
やかに見ゆ（天之真樹） 香取 秀真

まひる陽の新葉のてりの影なるや青木葉の実のあか
玉うるはし（同） 同

青木の照るばかりなる赤き実を朝かげの庭に見つ
たのしき（群鵲） 宮 柊二

あおぎり（あを） 青桐、梧桐

Firmiana simplex W. F. Wright.

あおぎり科の落葉喬木。幹の色が青いのでこの名があ
る。多分中国の原産であろう。葉は広く大きく、先は三
ゝ五裂、長柄。夏、黄白色五弁の小花が群がり咲き、実は
莢状で大豆のように円い。葉が大きくてよく茂るので日
蔭用の庭木として最適である。街路樹にも用いられる。
幹 梧桐は幹をみる木と窓ちかく植ゑし嗜好もありける
ものを（庭苔） 岡 麓

わが子等がおしろいをもて青桐の幹に字かけばうぐ
ひすの啼く（夏より秋へ） 与謝野晶子

あをぎりの幹の青きに涙なすしづくながれて春さめ
ぞふる 長塚 節

芽 日に光る青桐の芽を眺めつゝ病むとしもなき黒き眸
の色（山河） 金子 薫園

若 青桐の木ずゑ木ずゑに人形の笠かも置ける赤き若葉
よ（さざれ水） 窪田 空穂

梧桐の瑞のわか葉のひろがりてふはりふはりと風わ
たるなり（庭苔） 岡 麓

梧桐は幹さへ青しさやさに色映りあふ瑞葉のうご
き（斑雪） 土田 耕平

青 梧桐の夏をすがしみをりは暈の上にねまく欲り
すも 長塚 節

青きかぜ青桐を吹く初夏の朝の机の軽き手ざはり
（山河） 金子 薫園

梅雨期に入らむとぞする空白く青桐の葉群揺らぎて
止まず（さざれ水） 窪田 空穂

青桐のしみ広葉の葉かげよりゆふべの色はひろご
るらしき（赤光） 斎藤 茂吉

梧桐の広葉のゆらぐおとおもし夜露しとどにおりし
を思ふ（国原） 藤沢 古実

花

きと思ふ（白い風の中で） 生方たつゑ

日出づれば即ち暑し露もてる梧桐の花花粉をおとす

（水魚）

島木 赤彦

梧桐の花の香あつき夕なぎにひぐらしひとつ庭の木

に鳴く（天之真禰）

香取 秀真

梧桐の花房垂れてあしたより蜂のうなりの窓にちか

しも（藤の実）

四賀 光子

実

青桐のむらなる莢のさやさやに照れるこよひの月の

涼しさ 長塚 節

夕でりの光かわきて梧桐の実のはぜにけるすべし

ましや（少安集） 土屋 文明

窓近き青桐の実のからからとからからと鳴る寒き夕

ぐれ（常盤木） 佐佐木信綱

黄

秋の霜一度下りしにこの台の青桐の木立皆黄となり

ぬ（さざれ水） 窪田 空穂

家間の狭き通してさす夕日逆まに照らす青桐の黄葉

を（同） 同

落

この部屋に見やる青桐澄み深き空に浸りて真黄とな

りぬ（同） 同

枯れて落ちぬ青桐の大葉音高く落ちたる上に次ぎて

落ち来る（鏡葉） 同

あきらかにこと立てをせず日はすぐる青桐の葉も落
ちて冬なり（川波） 高田 浪吉

おのづからす枯れの早き自生梧桐日のさす時を吾ら

遊びつ（自源泉） 土屋 文明

あおた（あを）青た） *Fraxinus Sieboldiana Blume.*

とねりこの別名。もくせい科の落葉小喬木。高さ約六

メートル。芽に褐色毛を密生する。葉は羽状複葉。雌雄

同株。春、四弁淡緑色の細花をつけ、長い翼を持った果

を結ぶ。

葉あり花さく青たこの一木あり集るは僧ともたの

人とも見ゆ（六月風） 土屋 文明

あおつづら（あを）青葛

Sinomenium diversifolium Diels.

つづらふじ科の落葉の蔓性草本。雌雄異株。蔓は長く

伸び緑色で細毛がある。葉は長さ約五センチ、広卵形、

縁は時に三裂。夏、葉腋に数個の黄白色の細花を付ける。

木部及び根を漢法では木防己とよび、アルカロイドをふ

くみ、利尿薬とする。別名、つづらふじ、かみえび、あ

おつづらふじ。

山がつの垣ほにはへる青つづら人は来れども言伝も

なし（古今集卷一四）

龍

野を見れば春めきにけり青つづら籠にやくまし若菜
つむべく（拾遺集巻七） すけみ

御狩する駒のつまづく青つづら君こそ我はほだしな
りけれ（拾遺集巻一九）

柴の菴に這ひおほはれる青つづらむづかしげなる世
にも経る哉 源 俊賴

谷せばみうき節しげき青つづらいかに心をのばへて
かみん 藤原 家隆

花筐つくる狭山の青つづら手に手をこそはくまほ
しけれ 香川 景樹

あおな（あを） 阿平奈・蔓菁

かぶらの古名。解説はその項参照。

食薦敷き蔓菁煮持ち来 梁（うづはり） に行藤懸けて息む此の君

（万葉集巻一六）

長忌寸意吉麻呂

霜あれし土に覆の苫たててささやかに萌えし青菜を
かこふ（少安集） 土屋 文明

あおのり（あを） 青海苔

Enteromorpha intestinalis Link.

緑藻類の海藻。体は細長く、円筒状で繊細。長さ約六
〜三〇センチ。磯辺の岩などに着生。乾して食用。

ひきしほの海岸一面青海苔なり向うに寒き富士の雪

光

冬の海朝くもれり里の子が平岩つたひ青海苔を掻く

（庭苔）

岡 麿

あおみどろ（あをみ） 水綿、青味泥

接合藻類の淡水緑藻。糸状をなし、葉緑体は螺旋状、
種類により一または数本接合して厚膜、褐色の接合胞子
を作る。田、池に多いが流水にも生じ、生理学、細胞学
の実験材料に使われる。あをみどりともいう。

青みどろ紅の花にせまる如く崩れし花のしづみあへ
なく（六月風） 土屋 文明

青みどろ亭麿をめぐり流るれば我が待つ春の近しと
ぞ思ふ（自流泉） 同

あをみどろ黄いにしづみて夕茜きはまる渚しばし
ゆくべし（黄衣抄） 山本 友一

あかがし 赤櫟 *Quercus acuta Thunb.*

ぶなのき科の常緑喬木。山地に多いが、人家附近にも
植えられる。高さ大きなものは二〇メートルにも達し、
五月頃、褐色の花を開く。葉は長楕円形で大きい。花は
単生、雌雄同株。実は年を越えて成熟し、楕円形で長さ
約二センチ、褐色。木材は堅くて帯赤色を呈し、用途が
広い。和名はその材色に基づいている。別名、おおがし、

おおばがし、漢名血槿。

うら葉みなけえ光りつつあか槿の幹たくましく貫き
立てり（一塊） 土田 耕平

わが庭にそこばく植ゑし赤槿のけふのしぐれに葉を
散らしをり（花藪） 大村 呉楼

ゆく春の雨は降りをり赤槿の古葉落せるあひだあか
るく（潮汐） 鹿児島寿藏

あかぢ 藜 *Chenopodium album* L.

var. *centrorubrum Makino.*

あかぢ科の一年生草本。原野に自生する。茎は約一メートルに達する。葉は卵形で、縁に欠刻があり、若芽は紅色。夏、粒状の帯黄緑色の細花を穂状につける。若葉は食用となり、茎は乾かして老人の杖とする。なおこれと同種で新芽の赤くならない種類がある。これをしろぎ、ぎんざ、又はしろあかぢという。

つやつやと日に輝ける紅のあかぢがありてころろな
ぎなん（立房） 佐藤佐太郎

そこらしくに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春
はいにけり 長塚 節

吾庭の梅雨の雨間の花どころ藜しげりて青蛙なく

北原 白秋

露霜に染みしあかぢの赤茎ははぐさ枯れ伏す中にま
じれり（小笹生） 岡 麿

野分はやし赤き煉瓦の洋館にさむざむなびく藜草原

（国原）

藤沢 古実

アカシヤ *acacia*

真正のアカシヤは主にインド・東部アフリカなどに産するまめ科の常緑喬木で、ネムノキに似て枝に針がある。葉は羽状複葉、初夏、葉腋に無數の黄色または白色の香りある小花を穂状につける。我国で俗にアカシヤと呼んでいるのはこの種類ではなくて、はりえんじゅ又はニセアカシヤ (*Robinia pseudo-Acacia* L.) である。これはまめ科の落葉喬木。北アメリカ原産で、明治十年頃に我国へ渡来。高さ一五メートル。葉は羽状複葉、小葉は五〜九対。初夏、白色の蝶形花を総状をなして下垂し芳香がある。街路樹によく用いられる。材は器具用、別名、いぬアカシヤ。また語尾のシヤはシアとも書かれるが、歌にはアの母音が二つ重なるのを嫌うと見えてヤを用いる方が多い。

花 あかしやの花さく陰の草むしろねなむと思ふ疲れご

ころに

長塚 節

あかしやの花吹き飛ばす朝あらし朝早ければ街のし

づけさ(庭苔)

岡 麓

あかしやのともしき花に吹きかよふ風ありて日の曇りたるかも(雲鳥)

太田 水穂

あかしやの花ふりたまる庭に居りて人をあはれと言ひそめにけむ(春のことぶれ)

釈 迢空

房々と枝を垂れたるアカシヤにここだ花咲き春過ぎむとす(紫草)

今井 邦子

あかしやの花ふり落す月は来ぬ東京の雨わたくしの雨(桐の花)

北原 白秋

青
アカシヤの茂はふかし下草は丈長くのびてにほひを放つ(山簗)

結城袁草果

鋪道の余熱あつき夕ぐれにアカシヤにさわぐ風の秋めく(花藪)

大村 呉楼

実
秋風や松の林の出はづれに青アカシヤの実が吹かれ居る(路上)

若山 牧水

黄
アカシヤの葉にわづかなる黄が見ゆれ秋すでに来る街のほとりに

金子 薫園

芽
札幌の大路に老いしアカシヤの末葉早くも黄ならんとする(木群)

宇都野 研

秋ふかく青き萌芽をつけそめしアカシヤは野にあかるかりけり(明る妙)

尾山篤二郎

落 アカシヤ並木落葉しはてて荒海の波の飛沫を浴びつ

つゐたり(耕余集)

峯村 国一

あかそ 赤麻 *Boehmeria triuspis Makino.*

いらくさ科の多年生草本。山地に多く高さ六〇〜八〇センチ。茎はほぼ四角で、茎・葉柄は紅みを帯びる。葉は深く三つに裂け、中央の片は細長くとがる。縁に粗い切れ込みがある。夏、葉のつけ根に小さい雄花・雌花から成る長い穂をつける。

穂に立ちしアカソの上に白露の朝々はかがやくまで

に(自流泉)

土屋 文明

くれなるの赤麻はぬれて雫せり粒くだかれし軽石みちに

生方たつゑ

あかなす 赤茄子

トマトに同じ。解説はその項を参照。

赤茄子の腐れてゐたところより幾程もなき歩みなりけり(赤光)

斎藤 茂吉

をすからに露のしたたる赤なすの赤き心をうれしきぞ思ふ(天之真糖)

香取 秀真

あかね 茜・茜草

Rubia cordifolia L. var. Mungista Miz.

あかね科の多年生蔓草。根は橙色。茎は方形で中空、



あかね

(草木図説所載)

外部に刺がある。一節毎に四葉を輪生し、秋、白色の花を葉腋に着生。根を染料とする。歌では「あかねさす」として専ら「日」「昼」「月」などの枕詞に用いる。

茜草さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る
(万葉集巻一)

額田 王

あかねさす日は照らせどもぬばたまの夜渡る月の隠

らく惜しも (同巻二)

柿本 人麿

大伴のみつとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも (同巻四)

賀茂 女王

あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ (同巻一五)

あかねさす昼はたたびてぬばたまの夜の暇に摘める

中臣 宅守

芹これ (同巻二〇)

葛城 王

天の原あかねさし出る光にはいづれの沼かさえ残る
べき (新古今集) 菅贈太政大臣

くもりなき君が御代には茜さす日置の里も賑ひにけり (風雅集) 大江 匡房

あかのまんま 赤のまんま

いぬたでに同じ。解説はその項参照。

赤飯の花と子等いふ犬蓼の花はこちたし家のめぐりに (くろ土) 若山 牧水

たたずみてわれは見にけり裏の人赤のまんまを鉢に植ゑたり (全歌集) 三々 島腹子

梅雨空の青葉けぶる庭の隅赤まんま赤く露草の花 (さざれ水) 窪田 空穂

あかばな 赤花

Epiobium pyrricholophum Franch. et Sav.

あかばな科の多年生草本。山野の湿地に自生。高さ二〇〜五〇センチ。夏、紫紅色の小四弁花をつけ、果実は細長い。種子は微細で長白毛をもち飛散。和名赤花は夏秋にその葉が紅紫色に染むところからこの名がある。漢名、柳葉菜。

わがつみし草の下よりアカバナの萌ゆるに春をはかるこの頃 (自流泉) 土屋 文明